
リアルハート

シャナ丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルハート

【Nコード】

N7025I

【作者名】

シャナ丸

【あらすじ】

これは普通の高校2年生の恋の物語。
少し冷めた感じの高校生カップルが少しづつ熱い人間になっていきます。

最後には泣ける感じに仕上げたいです！

はじめての投稿なので自信ありませんが見てください！

はじまり

僕はどこにでもいるような高校2年生。

勉強ができるわけでもなければスポーツができるわけでもない。これはそんなどこにでもいる高校生の不思議な恋の物語です。

僕の名前は高山真一。

僕は今まで恋愛なんてしたことがない。

高校生になって恋愛したことないって言ったら皆驚くだろう、だから僕は皆の前では好きな人がいる振りをしているのだ。

ある日クラスでこんな話になった。

話を切り出してきたのはクラスのお調子者の林だった。

「皆もう少しくリスマスだけ一緒にすごす人いるのか？」

僕は少し焦った。

だって僕は好きな人どころか恋愛をしたことがないのだから。

僕は少し棒読みで林に言った。

「まあ俺は狙ってる奴いるけどな」

本当に軽い気持ちだった。

別に好きな人がいるってわけでもないのに……………

林はこの話にもものすごく食いつき僕に顔を近づけて聞いてきた。

「誰だよお前の好きな人」

僕は答えないと嘘だと思われそうだからクラスで一番静かな女子だということにした。

「栗沙耶だよ」

「え、あいつ地味であんまり喋らないじゃんか」

「別にいいだろ」

僕は少し強い口調で林言い放った。

その時僕は後ろに視線を感じた……………

「んっ？」

「どうした真一？」

「いやなんでもない」

誰かの視線を感じたのだが気のせいみたいだ。

こうして僕たちはたわいもない話をして帰宅した。

帰り道

僕は家に帰るときに絶対に公園によることにしている。
なぜ公園に行くのかつて？

特に理由はない。

というより僕も理由を知らないのかもしれない。

学校が終わる頃の公園に人気はなくて、僕はいつもただ座って時間を潰して家に帰るのだ。

時間を潰してから帰るのには理由がある。

僕の家族は仲が悪い。

もう姉とは1年は口を聞いてないだろう。

親とは仲が悪いだけではないが、特に話すこともない。

今日もいつもと同じように公園に行く。

だけど今日はいつもと違う景色だった。

いつも誰もいないはずの公園に先客がいたのだ。

しかも、公園にいるのは雫沙耶だった。

今日は林とコイツのことで話してたから気まづい。

僕は帰ろうとした時いつも喋らない雫が僕に話しかけてきたのだ！

「高山君今日は林君と私のこと話してなかった？」

僕は少し間を空けてから雫に言っただけだった。

「クラスの女子で誰が好きかって話してたんだ。僕大人しいでしょ、だから同じ大人しい雫みたいな子が彼女ならなあ〜みたいなこと言っただけだ」

雫は少し顔を赤くして下を向いている。

「あつ！でも半分冗談みたいなもんだから」

愛想笑いで僕はごまかした。

雫のことが好きとかそんなんじゃない。けど少し興味はあるのは確かだ。

なぜ興味があるかって？

そりゃ顔もそれなりによければスタイルもいい。

雫は静かすぎるからモテないのは同じクラスになったやつなら皆知ってる事だ。

何で雫が僕に話かけてきたのかわからないが今日はこのまま家に帰ることにした。

「それじゃまた明日学校で」

雫は手を振って帰った。

スタートライン

昨日の公園で話かけられたのが気になって僕は朝から雫のほうばかり見てる。

そのことを林に気づかれてあいつが茶化しにきた。

「お前さつきから雫のことみてばっかだな」

「みてねえよ」

僕は照れながら下を向いた。

それから林のいうことを無視していたら授業が始まった。

授業が終わると僕は図書室に向かった。

僕は結構図書室に行くことがある。

特に理由はないけど教室にいてもあんまり楽しい話もないし・・・

・・・

そうしていつも図書室にいつてしまうのだ。

図書室には雫もよく来ている。

あんまり話した記憶はないが目はよくあう。

なぜだろう？雫はこっちをよくみている。

だけどそれは僕も同じことか。

図書室に着いたら僕は適当に本を一冊とって椅子に座り読み始めた。隣に雫が座り話しかけてきた。

「高山君この前のこと覚えてる？」

僕はうなずいた。

「この前はありがとう」

「えっ？なんのこと？」

僕は公園で会ったことかと思ってたのが違うみたいだ。

雫は頭の上にはてなを出してた。

そのまま雫は話始めた。

「図書室で高い所にある本とつてくれたでしょ」

雫は恥ずかしそうに頬赤らめた。

「あああるときか」

僕は思いだして両手を叩いた。

そのまま会話は弾み休憩時間はずっと雫と話していた。

雫は帰り際に恥ずかしそうに僕に行ってきた。

「高山君帰り暇なら一緒に帰らない？」

「いいけど……」

僕は即答だった。

やっぱり僕は雫のことが気になってるのか？

恋愛をしたことのない僕にとってこの気持ちは何なのかわかるわけがなかった。

授業が全部終わると雫が僕のところまできてじっと待っている。

「じゃあ帰るか」

「うん……」

この帰り道が僕たち二人のスタートラインだったのかもしれない。

告白

雫と一緒に帰るのは初めてだった。

少し緊張しながら僕は少しうれしかったのかもしれない。

雫もすこし緊張してる。

こんな時に会話が弾むわけもなく沈黙が続く……

雫が重い口をひらいた。

「高山君って彼女とかいるの？」

突然のことで僕は驚いた。

「いないけど」

「だよ。いてたら私なんかと帰ってないよね」

「雫も彼氏いないの？結構可愛いのに」

雫は真つ赤になった顔をおさえていた。

「私なんて可愛くないよ。それに地味だし……」

なんか気まづくくなって僕は話題を変えた。

「なんで僕を誘ったの？」

「正直僕なんてあんまりクラスでもあんまり目立たない奴だぞ」

雫は少し難しそうな顔をしてこっちを向いた。

「私もよくわからないの。だけど高山君が私に似ていたからだと思
う」

「なんだそれ」

「私同じクラスになってから高山君のことを見て思ったんだけど、
高山君ってクラスの友達とか同い年の人のこと自分より劣ってるっ
て思ってたない？」

「はあ何言ってたんだこいつ？そう思ったが僕はあえて言わなかった。
いや、多分凶星だったから言えなかったのかもしれない。」

「私もクラスの人たちが幼稚に見えてしかたないの。男の子にはわ
からないだろうけど女の子の友達関係って複雑なの」

「まあ女の子って友達関係にうるさいからなあ」

「そうなんだよね。いつも一緒にいなきゃ行けないし誰かがどこかに行く時もついていかなきゃいけないし、私はそういうの嫌いなんだよ」

「僕もその気持ちわかるかも。僕も人に合わせるの嫌いだもん」

「やっぱり私たち似てるね」

そして雫が恥ずかしそうにこっちを見てくる。

「どうしたんだ雫？」

雫はよし決めたって顔をして右手をぎゅっと握ってこっちを向いた。「私高山君のことが好きです。同じクラスになってから気になってただけど私恋愛とかしたことなくてこの気持ちが好きってことかわからなかった。だけど今日高山君と話してて気づいたの、この人とならやっていけるって」

そして雫は頭をさげて手を僕の前に出してきた。

「私と付き合って下さい」

多分この手を握ればOKということだろう。

僕は自分でもわからないがすぐに雫の手を握った。

雫は震えながら顔をあげて僕の方を涙目で見てくる。

「ありがとう。もし無理だったらどうしようって……」

雫は泣きながら僕の胸に沈んできた。

僕はそれを受け止め抱きしめてただ時間がすぎるのを待った。

しばらくして雫が泣きやむと僕は雫の手を握って涙を拭いてやった。

「これからよろしくな」

「うん」

「今日ももう遅いから帰ろうか」

「そうだね。じゃあまた明日」

これが僕が生まれて初めて告白をされた日だった。

そして僕たちは第一歩を踏み出した。

交換

雫と付き合い始めて初めての学校の日僕は緊張しながら登校した。そついや雫にアドレス聞いてなかったな、後で聞いてみるか。そう思い僕は駆け足で学校に向かった。

校門前にはいつもいる生徒指導の小川先生がいる。

小川先生は剣道が強くて生徒指導の先生の中では一番おつかない先生だ。

僕は丁寧にあいさつした。

すると小川先生が「おい、高山！」

「はい、なんですか？」

小川先生はニヤニヤしながら僕に聞いてきた。

「お前なんかいいことあっただろ？」

僕は自分でもわかるぐらい恥ずかしそうな顔をして小川先生に言うてやった。

「別に何にもないですよ」

僕はあまりの恥ずかしさからそのままダツシユで校門を抜けて階段を駆け上り3階の教室にある自分の席に座った。

すると雫が心配そうな顔をしてこっちにきた。

「高山君すごい汗だけど大丈夫？それに顔真っ赤だよ」

「ああ大丈夫少し走ってきたから」

そして僕が呼吸を整えていると後ろから襟をつかまれて後ろまで引きずられた。

まあこんなことをするのは林ぐらいだよ。

後ろを振り向くとやっぱり犯人は林だ。

すると林が血相をかえて僕に聞いてくる。

「お前雫と付き合ってるって本当か？」

僕は一瞬嘘をつこうと思ったが同じクラスだしすぐばれると思って本当のことを言った。

「ああ昨日から付き合い始めたけど」

「かあく！お前本当に雫でいいのか？変わり者だし、あんまり喋らないし」

「大きなお世話だよ」

林が悔しそうな顔をしている。

「まあお前も彼女つくれよ」

僕はそう言い残してまた自分の席に戻った。

これからはまたいつも通りの授業が4時間目まで行われた。

そして4時間目のチャイムが鳴り授業が終わる。

僕は雫の席まで弁当を持っていつて照れくさそうに言う。

「一緒に弁当食わないか？」

まあ彼女なんだしこれくらいいいよな？

僕は自分にそう言い聞かせた。

「うん一緒に食べよ」

この時の雫の笑顔は可愛かった。あまりクラスの女子を可愛いと思ったことのない僕が言うのだからめっちゃ可愛かったのだろう。

僕は雫の席の近くの子に椅子を貸してもらい雫の席の横におく。

僕は人の椅子を勝手に使うやつが嫌いだから僕自身はちゃんと許可を取ってから使うことにしている。

「そっぴや雫付き合いたんだけしアドレス教えてよ」

「うんいいよ。私も今日は聞こうと思ってたとこだし」

雫は鞆の中から携帯を取り出し、僕も急いでポケットから携帯を出した。

「じゃあ赤外線僕から送るよ」

「うん。じゃあ私は受信するね」

お互いに赤外線で送受信する。

いつも思っただが赤外線を受信しているときって静かになってしまっう。

その一瞬だけものすごく集中していしまっう。

本当に人間は不思議なものだ。

そんなことを考えていると赤外線は終了していた。

このあと僕が受信、雫が送信をしてアドレス交換終了！

「私メールあんまりしないけど気にしないでね」

「別に大丈夫だよ。何かあったときは相談に乗るからメールしてきてよ」

「うん」

こうして休憩時間は終わり、また午後の授業を受けて僕は家に帰るのだが雫と一緒に帰ろうと思いつく雫を探すが見当たらない。

僕はそのままたいつもの公園に行った。

交換（後書き）

今回はあとがきを初めて書いてみます。

これが初めての小説なので未だに文章やストーリーが微妙ですがこれからがんばって3日に1回の更新を目標にしようと思っています。

アドバイスなどありましたら感想に書いてくださいm(_____)m
評価もしてくれるとうれしいです。

空

公園に行くとブランコに座る雫がいた。
何か悩んでるようだ。

僕は心配になり声をかけた。

「おい雫」

雫はこちらに気づいて驚いていた。

「高山君どうしたの？」

「雫こそどうしたんだよ」

「え!？」

雫は少し言葉に詰まってこういった。

「空が見たくなかったから……かな？」

「どういうことだ？」

雫は空をみて僕こういった。

「私ね、空って自分の心を映し出すものだと思うの。だって気分がブルーな時って空も暗くない？」

「ああ確かに」

「だからね私自分の気持ちが変わらなくなったら、空を見ることにしてるの」

こんな時僕はどうしたらよかったのだろうか？

僕は女の子のことなんてわからない。

彼氏になったこともこれが初めてだ。

こんな時普通の彼氏ならなんて声をかけるんだろうか？

そんなことを考えてると雫が後ろから抱きついてきた。

「え!？」

僕は驚いて後ろを向くと雫は泣いていた。

「どうしたんだよ？」

雫は泣きながらこう答えた。

「私を……私を助けて……」

そのまま僕は雲をベンチに移動させて悩みを聞いてやった。

空（後書き）

久しぶりの執筆です！

話の内容が変になってるかもしれませんが見てください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7025i/>

リアルハート

2010年10月10日01時54分発行